夢想兵衛胡蝶物語後編

四下

へ13
3096
9止

門へ13
號 3096
巻 9

昭和九年
七月二四日
購求

あしたゆふ。久々棚の下ちぶを。とゝ云てら。女ハ二布しそ。
と流るゞ。秋の登りも豊ゑて。昏ハ終日田圃の中ふいとまるゝ。
日波ろ〳〵ろ〳〵。馬ハ洗足しく〳〵。厩ゑ牽入る。夫婦浴しく。
ろもつくろ〳〵。門涼しく。ゑよりハ工もるくていふ乗〳〵ろ〳〵。これを称し
て建徳國の乗といふ。又一休和尚の歌ふ。

極楽ハいづくの程とたづねよ。秋柴立こゝ〳〵。又六が門。

と綠ゼーゞ。馬を追ひ。舟を操り。重荷を負ひ人ふ備ゑ。その日の挿り
懈らゞ妻子鶏ハべき母どの足を獲て。ゑ〳〵徐ゑるを腰へ著相知の酒店
へ立〳〵つ。床几ふ尻をゝけて一碗の村酒を傾け〳〵る。ゑよそハ工もるくて。
人間の欲楽。こゝ極ゑ〳〵とせん欲こゑ称しそ大莫國の乗といふ。
べ〳〵。それべ國を治め。家をそのく子孫ふ教え徳を鶏ハりのく乗もゑかの

大莫乃國樂
かこ白

建德の國樂

ず。寡慾にして情に違はず。かゝる人は善を行へども忘るゝがごとく恩
を施せども顧ざるがごとく。人のしらざるを慍らず。名の聞えざるを恨とせず
俟ことなくて求ることなし。楽まずして楽み足べし。夫智者　水を楽み。
仁者　山を楽む。この楽の字義解しがたし。流て若のごとくなるゆゑはその
義らく通ぜし上ある人いひけり。実知者は事理に通達して滞ることなし。
この故にて。智者　動きやすく。その楽み水の若し。又仁者　義理に安くして
遷らず。この故にて。仁者　壽くして。その楽山の若し。水はかとめて流るゝ
にあらず山は求めて静なるにあらず。その楽を求るものは。みな人慾の私心。
拙ずと楽むと似たるやうなれど拙ずものは倦むぞ。よりて藝には拙べといへり。
なりにとるれば拙ずものは求めて拙ずにあらず。この故にて教らんことを務むぞ。
手の動くにまかせて拙び足の運ぶにまかせて拙び。躰のよくしづかにて拙ずるゝ是



情のおもむく所にしてこれより求るにあらざれば。手の日に動き足の日に
運び。躰の日に静なること日を知に倦ことなし。しかるに世俗の楽みは。その楽を
求るなに慾多し。慾多きがゆゑに。物にうつりてその楽みに飽ことあり。されば
儒の教には楽みは極むべからずと誡め。又仏の教には西方極楽と説て楽を
極よとすゝむ。その矛盾なる事又しるべし。かゝれども先生がつねにいひけるは欲
四緯八紘に拙歴して。求めて楽み取ると嘆り。その楽むところ山水の為
にもあらず。又張騫が迹を慕ふにもあらず。只は雜説を好むがゆゑにもあらず。長
と説て人の経きを咎め。情慾を滅却して世界の俗を楽思聖人君子にならん
とこそ是則。青衛が海をうづめ。蟷螂が車を駐んとするにひとし。このゆゑに。
しく亦のものあはずして。雙款の思ひとなすまゝにうら。その身に種々の數苦を
受て魂を消させずつくりしといふをしらば。しかれどもうすのとかきまにあるがり

て。それふかくそりのみとかろふ。夫論辨ふ巧なる。蘇秦張儀ふまさりあるー。彼ホ六箇國よ遊說して。一旦富貴を極められども。德ふ知りて称さるりのみー。その兩雄ハ鬼谷子を師とし。鬼谷子ハ縱横家なり。源黃老より出て。黃老と弈角ちく。老子の一書を說ひろめるりのハ。文子と莊子のみなれて莊周ハ老聃の骨髓を獲て。孔子をそむ王も又等閑なりしど。その書よ我ちる說劍の篇ハ。說客のうへ。莊子の意よあらし又盜跖漁父の篇よいくて孔子を誇るがごとしハ。後人の附增ところ。東坡ちゞめそのようを唱ちる。莊子ハ舊五十三篇あり。郭象ぶ注ちるとそれ。その疑しれりのを刪去て。今僅よ二十六篇存ちといふ。もつれども。その說劍盜跖漁父ホの諸篇あり。列子ハ莊子ふ先ぶてるりのなり。鄭繆公ち時ちもはぐくちと。いへ有よ莊子ふ二五を称せり。その書ハ篇。大抵莊子。尸子。韓非子と相似ちる。

呂覽。淮南子ホの諸道家又老子の皮肉を獲ちる。呂不韋ハ秦の劇病を攻淮南ハ時を辨るふ。飾仁諱忌の辭とりてちのく老莊ふ本つくとい。ども。終ふその骨髓を汲ぶ。故よ言ち行ひと齟齬して或ハ奸邪ふ逞しく。或ハ反逆を謀り。呂不韋ハ藥を仰て死し。淮南王ハ誅せられる。李斯と韓非とその師を共ふ。かくて韓非ハ李斯ふ殺され。李斯ハ又趙高よ殺されちる。剌剌ふて思るれ。ぶ有よ。悪を佐て國を亡し。人を殺して自を殺ち。豈誠ぶらんや。李斯ぶ始皇ふまるしを。て書を燔。儒を坑ふ。ハ老子をろうくふとれバるり。老子ホ民を愚ふちとあるハ。自我ふ因ちといふのちようや。書を燔儒を坑ふて民を文盲ふ。ちんとちとも。改ぶ爲ふ因らして。罪なれを殺ちるいとぶ老子の本意ならんや。かくる有よ。いく狂もるの。秦ハ古びちるれ。凡道家ハ。辨あつて論義なく。儒教ハ論義あつて辨なし。旦道家の辨ハ。病乃能

書ふ仙て方あるなども。菓種を求めぐるに。是極めて人間ふ。行ひ難きなれ
べ。儒ふ入ることを用のるとに。只草野の士ら〳〵流て愛情を断。煩悩を
退け。面〳〵天窗の蠅を拂ふまでこと。を天下ふ布施をとも。人間ふ用ひ
ぐに。ちるるふ唐山幾国の時ろ。雑説の士ハ。老荘ふ因て剣剥をるとし。
方士ハ又幻術とりて人君を迷せ。利ふ世俗遂ふ老荘の本意を失へるを
嘆ぐに。老荘の書ふ。雲気ふ乗るんどいふるのあるをえく。実ふ仙人ふるるべ。
雲ふ乗ふ〳〵りのところ泛るもあるか。鳥の飛行をるハ翼あるべ。
ちるれども雲の上ふ。ゆきふとを受ぐに人ふ翼あるとも。翼るけるまで飛
行せんと。つでるるふ及ぶべき。且雲ハ気なり。その煙の如し。形あるりの。これ学ぶ
べきるへ。その寓言なるに推てちるべし。ちるるふ周穆王。秦始皇漢武帝。
唐玄宗皇帝なんどるるに。既ふ天子ら。れば老のおよいらんとを悲ま長

生〳〵飲乗をいつまでも極めんとるふ大慾起り。不覚ふ黄老の説を信用そ。
方士の為ふ魅され。或ハ蓬莱ふ仙丹を求さ。或ハ西王母を恋〳〵。種く
の阿房をつくされるとど黄帝以降。天子の仙人ハるれを原来嗜慾の
為ふ。庶幾ふ仙薬るれば命を縮め。国を滅を毒茶とるりて。世の胡慮を
送されるりを隠逸ふ拝べるるのりで仙茶を求め。山林を慕ふ
べき。世と金馬門ふ避るとハ。東方朔もるふあるべや。先生既ふ老荘
の呂ちねるとを好そ。又ちる〳〵儒仏をすべえて。雑説を逞く。物ふ逆ふと
りて。気の葉るうとるハ始皇漢武乃仙丹を求るが為ふ毒を後世ふ流
をちるざるふ似ちる。世ふ老荘ハ学ぶべ。只老荘ハ行ひかに。道家の説
を甘ざるりの。おのゞ天窗の蜂を排ふハう。他の天窗の蜂を排うんとるる
とれハその人ちれを鞭とおりひて。却とを怨るん。既ふその言の用ひられ

ざるとまうるのごとく口を酸くするハ勿論なれども。迷ひてこづくら曉れ
ものハ。ぬけ〳〵迷ひどもおのゞ愚をまるものハ。究めて愚なるらば。先生もまた
その一人ゝ。て惑ひてこづくら惜るめんどうてその辨。百發百中せどと
いふとも。童蒙ふ孟ぐ。惜るみその才の情ふるてる有る。生涯を老莊イ
とふされて世の狼狽ものとまりハるゝハいと恥べきことふこそ。萬巻の書を読て。
萬里ふ往還せんとハ丈夫の所ふ所なれども。遠く父母の國を去て求て
危を手あるハ君子のせざる所なり。そこの一條の論辨ハ。こる先生の為ふ
いふのゝ。かゝる陳奮濠藉をゝ。ぜうもを臣て童蒙婦女子ふ退屈させんハ。朕も
人情ふ疎きふ似られば。今ハ去ら。よの程ふ。そ口を閉むべ。歓乐郷の國王
ハ。脣うとく〳〵てぺらく〳〵と口さてく。鼻き性質ふのうるんど。笑ふものの為ふ
ハ。こ重も又多用の辨るり。現練言ハ耳ふ逆ひ良茱ハ口ふ苦し。岡目八目

されもく。他の善悪ハ見るめ是ど。プラ吾悪のんえざるこ七九の癸ふ吳
るのらはば。ぶらうと。ぶくる夏も。人ねる何ぞいろんどるハ儁教と道家の說
の用捨をいさてうこ。ことう外ふハ道もなし。先生老莊の說を樂
とるふびひとう老莊の室ふ坐して。ぞうを受何有の鄉ふ拔べ。自然の乐を
をこの一ぞ。朕今徐福が舟をりて。日本國へ送てこんべけ是ばけやく成り
ぬ。いとるのごく〳〵紀勅命ふ爰ふ兵衛ハ感服して。俟坐ふ拭ひあくぞおそるく
きうこ。勅使宮ふ有うて。泰紀まで。ふふあまれど。某そのたゞめ。拔歷を
ふひさちるこ紀浦島仙人の教ふふって。飛行自在る紙老鶴を獲てゆ
ば。万里の往還いと易し。舟車をのるふ及びゆんぞと。推辭しべ。歓乐王
うさねて。先生既ふその紙考を獲て飛行自在をいさをこいうるのるとと
きうこる紙。紙考ハ今何処ふあるぞうりとは。と宣べ。爰兵衛亦きうを

なり。何の益とハならざれど。班輸が雲梯。墨翟が飛鳶に異ならば。挙りてハ必飛行しつ。又降りといふとみれば。その身をおろして。彼ハその手に虚空に沖りゆく。しかるに一旦貪慾國にて。件の紙鳶を失ひしが。貪婪國にて又是を獲たりしが。さまでしもあくねに。國王呵々と笑せたまひ。物のくゆるさるゝといふとも。又必失ふ時あり。加以その紙鳶よく飛行しつゝ身を繋げるやうともなりで。これに乗るハ究めて危し。枉て永く行より帰りゆくべしと叮嚀に仰ありけれども。菱太兵衛ハ再推辞て従ひ奉らバ既に蹊の國を経れど。危しともおもひかざりしに。今さら可惜紙鳶を捨て。毎に家んハ却危し。只このまゝになしのえへうしとまうせしべ。この人ハ二つ緒に侍ふべしとて。有司に仰て。菱太兵衛を。客館に休足さして。これを欵待し。物賜るべきよしを宣えしに。菱太兵衛ハこれをも固辞奉りて。せめて身の暇を



乞既に罷り出んとするとき見えしめて仰ありけるに。彼國王の面影ハ。よく浦嶋仙人に似たれバ。只いぶかしと疑ひ惑ひ原来ハこの欽楽御ハ世にいふ蓬莱山にして欽楽王ハ別人なれバ。浦島翁の事を又教喩しめしにやと推量すれども。堂上堂下に諸司百官袖をつらねたれバ問ふによしなく。その官人ホに送られて。王城を出にけれバ。舊の処に到りて。彼官人ホハ皈りぬ。さる程に菱太兵衛ハ。欽楽王に教喩されて。やゝしばし慚愧し。國王の面影の。よく浦島に似たりといふに浅ましくも鈍ましく。忽地矢の如く速に日本へ立皈らんと思ひしかバ。ありしやうに紙鳶をうち仰ぎて揚けども紙鳶ハ何処へ出けん。日ハはや暮なんとするに降り来ず。現はるゝものハ失ふとあり。水行より送り来るべしと。國王の宣ひせしを。おのが兵意地に推辞られバ今さら紙鳶にあらざとて王城へハえ行べきものとせんかくせんと思ふにその中

ゆとうらねが只彼天の羽衣を人ふそれ一老女ふ呉るゝべ。彼此ふとろ。松の
樹ふのゝ目をつけて。ゆ〳〵く田圃の間ふ出さろ。そうん丑べ十歩ばかりある男の
童がふさろ。ていと大さなる紙老鼠をうあんてこれいつぶりのるう。香ちのゞ先
ふ引つけこれがとるゝ〳〵せよと。童ふをそれうとろくべちゞつろるゝて。牡〳〵く
走り近づく犯ふ件の童子ホハ。互よゆゝ。放さで。と爭ひつ。紙鼠をさろり
と引裂さろ。夢想兵衛ハ吐嗟とだろう。一歩を十歩ふ飛べがごく。その遠
ふいゆえて見えべ紛ふぐゆゆあ〳〵ぬこぶ紙鼠るるゝべ面色蒼〳〵るう。赤赧
るりて。忽地怒まる声をあり立汝ホいるるゝべこぶ紙鼠をかくいむぶるゝよう
裂さる。途ふ送さるを拾つゞといふ。歓乐郷ふハ仰げるゝ不るるりこの賊奴
と罵ゝべ。童子ホ見ろうて冷笑ひ。ところ汝ねとをいふ呉國人ろる。吾儕ハ
ぐろ送さるりのを拾べさ。ゝべハ天ろ降さるゝ。夫天のふふるを取ろゞゝべ。

却　禍ありといろう。異國人のまるとるゝぶ。といハもあくゞ。愛赤兵衛ハまを
まを腹ゝそ。甘言吉瑞るんどこそ天のふふるりのともいいめ。紙鼠ハ人の
他まるりのふて天ろ自拷と降さるふあゞ口さ已くもいひろむるハそのの
賊公顕然さろ。舊のゞ〳〵ふて返せ〳〵せく。といたまけべ。童子ホ發ぐ気色
るの〳〵ぶ國の小児ホハ俎豆を陳礼容を設け。灑掃應對を身の勤とゝて
習学問ふ暇るく。父兄ふ事るゝと。乐とさるもるふ紙鼠とやらいふりのハさ
ろう。童盃の弄物と弄びて乐とさるりのゆ已ハ豆ハぶ國ふるたりのるれば送
せ一人のるたとまはろうてぶ田の畔へうけてるゝどふせんとゝひのゝぶん牙
その主るうと宣ふを惜ゝて返さでといふるふあゞ。ぶん牙賊公あるもるふ人と
偷児といふまあらん。ろうゆゞ。と罵〳〵と國風るゝべまとるゝびて義理ゝ
怜悧く恥ゝめさくりてゆれね。と回巻もあくゞ。畔を隔て投うゝと敗紙鼠を。愛赤

ひさうひやうえ

兵法に忙しく。受さんとするゆるさず。水閘へ落せうべ。紙鳶は忽地ゆゑ濡れて。糊たるれ紙破れて骨は水底へ沈ふけば。堪忍の二字を説て人を諭せ。爰に兵法も。ものゆゑ翼つゞ為ゆへ令の綱と憑そう。紙鳶を破られるのそるゝ。形をもそめて失ひ。うべ。進退たゝよ究りて。握り固め。左右拳と共に怒りを揮起し。きりかつて前に立つる。童子の沈を打んとせゞ。打たづ〳〵るたづゝふつと牙を鉄して水閘へ逆さまふ。ちくりて沈を研に打碎れ。一声苦と叫びもあくさで。囲堰の中に死するとは。こは南柯の一夢ふて。愕然そしてもどろ紅受んとろ。全身よろ冷汗ゆゝれ。神奈川の本国の漁舟の中に卧るゝ。夢のこちして枕ふもたる楫をちゝふ。やう〳〵ふ牙を起し。よづ汗を拭ひきり。遥に西を見くまば。その日もいまだ没果ざ。牙は半日の舟に睡りて。更に数年を経るが如し。不思議といふもあまりゆゑまべ。つ〳〵とちゝ

本目
或は本牧
に作る
藤金志
本目は
低るかる
出流そ
ゆゝうの
目なり

さるとは
本目と
いふ牛
馬の牧
なり

列子卷
三周穆
王篇第
十一張

ゆゝ。これかくしよう勲に。諸子百家の書を読とのゝとも。只雑学ふのゝこゝ
をとゞめて。遂に聖人の大道を極めゝ。只管に雑説を好めば欲世に厭ゝこの
背さゝ。地上の風波を避んとて。不覚に妄想を発せうべ。爰に紙老鴞ふ祭
て名をとゞよ。ゆゝうね国ゝを拒歴。その国俗と舌戦ゝて。好むゆゝに牙を教せ
る。者れゞれを誓め。人を愛るふ足りねゞ。こゝを愛ゝて可るゝんや。亦爰るゝべ
そして可るらんや。そひ出せゝてのこゝそあれ。むゝ唐山鄭国に。野に菊を取るもの
あゝり。殺さ走る鹿を迎て。繋てこゝを繋ゝこゝを。人のゝんとをゝそれて。遽て
隍の中に菊ゝ。菊を上に覆ひつ。尊ゞて限りる。かゝて又菊をとるふ俄に
その義せ外を弗と迷ゝまゝけり。疑ひ惑ゝて遂に亦こゝを愛るゝとゝひうべ。只
そのこをひとり云て生るゝふ側にこゝを呼るのあゝその言に因て義る。庶を索
てこれを取ぬさて家にゝりてゝその室人に問ゝ。向に菊とるものゝ庶を得る

愛とえてその外を忘れしるといひしがつられてこれを伐ふる汝彼が愛ハ
真愛なりしといへばその室人胴根をうせそれハもん牙が愛ゆへ樵夫が庸を義せ
ずとこれをひるるものるうんもうらべ樵夫がまた愛ふハわるでもん牙のまた愛し
とふ既ふこの鹿のるふ扮べ彼が愛ふ欲夫もこれをもうざるうかくく
苟ふれ者ハ鹿を失ひつるとをうひ忘れうけれべその夜の愛ふ鹿を義ふるる
外と彼庸を取ふる主をおざくとえふしうべ爽旦愛えー隨ふ鹿を取ふる其
人を索めて是を訟て爭ひるる時ふ五箇の禁法を掌る士師といふ官人これ
をとりていふ汝ぢめハまつ庸を伐ふる妄ふこれ愛ふとおりて
かくて又ふ愛ふよりて庸を取ふる人を知て妄ふこれを実ふと謂ふる彼ハ真ふ
汝が鹿を取て汝と庸を爭ひ彼が室人ハ又愛ふ鹿を失ひ人をえて人の鹿を
伐ふるふハ一切あるしとのこるるかくて今ふこの鹿あるふよるるれハこれを二つふ分ふしと



説諭しそこの類を鄙君ふ咲えあぐ且べ鄭君咲のひて嘻士師も復愛ふ
人の鹿を伐るあやあらんざるんと疑ひ惑ひてこれを大臣ふ問ふ大臣答て愛
ふ愛ふざるとハ臣これを無ーるこれを愛を学さんあハ只黄帝と孔子のみ
これをうくたものハべるれども是ハ今ハ亡君只士師がまうしたるを詢と
たものハこそうめれと回巷ふりしとふこのあるが是べるれ今ハうべ少年色慾
貪婪强飲食言煩悩哀傷歓乐ハの異國と往歴てそこを愛しとらくども是れ
真ふ愛なるふ欲抑愛ふあるざる欲聖人なるべかるはこのうらんふいふこの人の言
ふ苦中の苦を喫て後人の上の人ふるるとのひ或ハ世ふある人文字をもれべ殊
更ふ憂苦苦愛ーとのうるれ勢ふ字をもるるふ苦ーれ愛をえるふこそもうれども
苦ーて人の上の人とるべ何ふこれを苦ーとせん夫馬ふハ猗べ。るをべ爽ふ
べうべ塵ふハ交ふべ。塵ふハ海るべうべ。順逆ハ彼とうれふあり。虎ふ食ふる

又生物を与ざ。又碎ざるものを与ざ。り老ふ生物を食せ。碎ざるものを与ざ
ふべ。餓ふるとも忽地ふ人を食んとする。毒ふるとも夫虎ハ人と異ふ。
養ふものふ媚るハ順なり。故ふ是を教ふハ逆なり。是古人の金言を切ぬ。
才ふ感服するハ順ふ。故ふその非を攻るハ逆なり。是古人の金言を切ぬ。
つと是を喩し。養虎の法ふ倣ハざ。又竟ふ食まるん誠を人ふ尽さとも。
順逆の理をもふざれば危し。そふもかくふ三誡の法を守りて性ひ。言
なりけりとさもく嘆ふて。直と舟を漕ぐ。次の日より草紙を綴り起して。
巻ふ成る国くの。形勢ハさふなり。自他の論辨をもちもるく編次て九巻ふ。
胡蝶物語と号ふる。ふづふ抗の友とするのふ人ふハ絶て見ることを許さざ。
かくて又ふやふ。ふ胡蝶物語ハ荒唐ふして。その辞ひとふ俗ふ。是を
君子ふ呈ふ。ふるふ。身しめて閲ふべふ。又世俗ふ呈ふ。人情ふ情けふて。



是を又取べふ。されがとて又是を。女子童蒙ふ呈ふ。難解ふして
巻を掩ふ。夫君子の為ふ取られざ。又世俗ふも厭ふて女子童蒙ふ捨
られるが。実ふ是ふ角の矢ふ。旦是を惜ふハ高くふまるべ。これ彼宋の陽里ふる。
草子ふ。庶ふふ倣んふハ。ふづふ草紙を裂捨て。世ふ伝ふ。ひとりごち。
猶ふ敗籠の底を捜ふ。件の草紙ハふのふ。ふハふと怪ふるのふ。これを
さハ底まんとふふ。ふて。ふて。然念ざふる。ふるふふその九ふ。ふ。
衛ふ。彼紀行を綴ふと。紀友ふ。某甲側ふ。ふて。ふ。
ふ。その説を欲ふ。稿果ふ。ふ。ふ。
ふ。ふ。籠の底ふ秘て。ふ。ふ。
ふ。ふ。家ふ。ふ。ふ。奪ふ。ふ。ふ。
書の世ふ出て。ふ。人ふ。ふ。ふ。

列子卷一天瑞篇第十九張湛之国氏大富云

○總評

聖賢の遺書をえて。ふかくその語を喜とゝぐども。いまゞその道をもとゝ
ざるものハ。遂ニ殃を惹ニ至ル。ふかく慎まざるべし。斜ハ国氏といふものありて大ニ
家富さかえ。又宋国ニ向氏といふものありてその家究て貧しく死
ようとするころ斜ニあひてその術を請求めしかば国氏ニ直ハ告ていはく
これハよく盗をするのをしへ。盗をしるハ一年ハ口を糊ニ足り
二年ハ衣物をしるべし。三年ハ貯あまりあり。直ちに州閭
ハ施をとゝのへ向氏喜てふかく喜びその盗をする言を喩てその盗をする道
を喩らしめ。ついて夜間して垣を踰室を鑿目のごとくハ不探ざる
ところ[illegible]ニ[illegible]ニッとも。盗ぞ事顕ニ賊ハ似るの罪をゆるされべ
その罪を購ん為ニ先祖相伝の田園居宅をさく失ひ[illegible]ようてふたゝび斜



ハ[illegible]ていふく国氏を怨ーくべ。国氏いふものの説を聞て。嘆息。ものゝ盗
をするとその道ハ[illegible]ものゝ至ル[illegible]ハ今審ニ[illegible]を
告ん。天ハ時あり。地ハ利あり。ものゝ盗をするとハ世の賊ともなるべし。これ禾
を殖てこれを鬻。又獣を獵。又魚を取て[illegible]を鬻。かくのごとハ家富
さかふ。直ニ天地所産の淵澤を盗ミ。又山沢の産育るを盗ミ。竹木を伐て。
垣を築。室を建陸ハ禽獣を盗ミ。水ハ魚を盗ミそのものを有とするを
盗ミ抑盗ハあらずして何ぞや。夫禾苗竹木禽獣魚鼈ハ[illegible]天の化
所ハ[illegible]ものを有ハあらずものを有とする有ハ[illegible]これを盗む
といひしかるべし。造化の功を盗むを公道なれば殃なし。亦米穀
金銭珠玉衣裳雑具ハ至て人ニ直を似て人又これを聚むこれ
人化のものを天の与るものをあらべ。ものをあらべ。ものをもとこれ
ものを私慾をもとこれ

を盗んとおもふしるべ。生地より罪を犯すべ。かくて人孰をか怨んやといふ
ことをやうべ。理義ハ自然の理義なり。聖人の私ふ。偽り設るふあ
その理義ふうつて理義を説。且も又自然の理なり。既ふ自然の理義
を盗みて。ゆゑ有と。遂ふ童蒙を喩ふとなり。寓言といへども紀れ
て。罪なき王推てもるべ。爵禄富貴ハ人他ふて。天の与るものなれば。
賊臣弊ひふ学して。位を簒ふ。使佞ふして富を盗。これをゆゑ有と
もるなるもの。その罪の脱ものなれど。拒うもふざるものあらん。但人作
人巧を盗て。ゆゑ有と。その罪をもふざるものあり。病愈て。医師ふ
茅礼せざるもの。人ふ物学びて。酬謝の礼なるもの。古歌新句を盗て。
ゆゑ有ともるもの。人ふ借りて。ゆゑ有ともるもの。人の詩文章書画を
て。奪ひ去るもの。古人の偽書て。利を射るものなる是天の与るなあらば。

或ハ人情ふ拠り。或ハ公道ふ似るふよりて。竟ふ嘆ふざるのこれを罪な
といふといへども。天の盗て。ゆゑ有なるめとして罪なるなふハもろざて。
そぶ中ふ小説を作るものハ。盗と又妻なり。古今興敗聖王賢臣義士孝
女烈女の事迹。鬼神老仏の垂蹟古語舊説悉皆これを盗て。ゆゑ有
と。妻くハこれを妻ふ托と。既ふこの書ふ述る所。亦是妻くといふとなるハ今
ゆゑ批評もるも妻と。その妻と妻ふて覧もるものも又妻なり。人我一
切妻ふして。その妻と妻ハ。妻の中ふ妻を見て。面前ふ妻を説く。癡なる
なる。癡なるなる。実ふ是妻なるべ。これ豈妻を盗んや。その盗ると盗
ざると。妻なると妻なるべざるとハ。ずづ覚るものこれを辨じ。よく覚る
ものこれをもらん。

夢想兵衛胡蝶物語後編巻之四　大尾

予自髫歲愛讀書而善記爲及壯年耽著作而皆忘爲今知之矣我識也非我性我忘也非我心習而記爲勞而忘爲耳人毛髮皆黑而後白人眼目皆明而後翳人齒牙皆鋭而後脫人心神皆精而後倦設失觀變化於一身則老幼終始以爲我有順一化之自虛則識與忘豈我心耶一形之開闔一性之往來莊周嘗以蝶夢喻之故曰萬物同根是非一氣奚物而爲周奚物

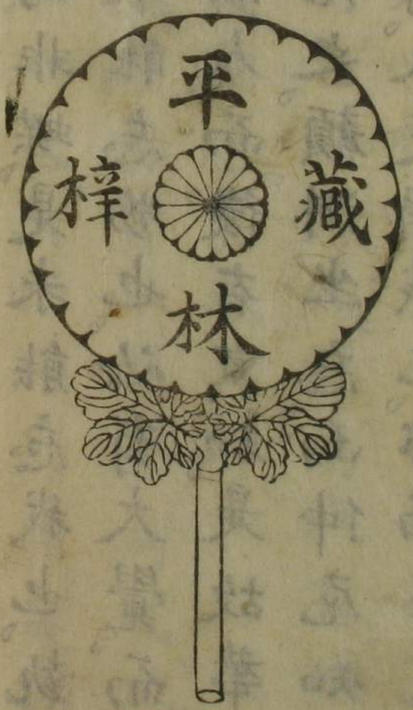


而爲蝶認周以爲非蝶是未能忘我也執蝶以爲非周是未能忘物也必有大覺而後知大夢必有眞人而後有眞知是故華子病忘而魯儒治之顏淵坐忘而仲尼知之夫苦而識之者未足稱識也勞而忘之者未足稱忘也一强一犯竊竊然而私之妄也心非我有而作是書者心耳名非我名而命是書者名耳有乎無乎我未能辨焉於是乎忘有無庚午仲秋望馬琴再識

東都曲亭馬琴著作

一柳齋豐廣画

全本前後九冊
文化庚午發市






東都書肆中金堂藏板書目

椿說弓張月　五編揃三十卷　曲亭馬琴作　前北齋画

夢想兵衛胡蝶物語　前後九卷　全歌川豐廣画　作

隅田川梅柳新書　六卷　全前北齋画　作

稚枝鳩　五卷　全歌川豐國画　作

勸善常世物語　五卷　全溪齋英泉画　作

曲亭水滸傳　五編揃廿五卷　全歌川國安画　作

優曇華物語　八巻　山東京傳作　可菴武清画

金鈴橘草紙　全五巻　古實物語　全六巻

旬殿實實記　三編　十五巻　曲亭馬琴作　歌川豊廣画

絲櫻春蝶奇縁　前後十巻　全　全　作画

皿皿郷談　八巻　全　前北齋　作画

右旬殿實々記以下の三部ハ先年祝融の災火に罹て版木灰燼となりぬ。于今一カ餘年を経るに彼翁艸誠の筆頭微妙の巧ミ古今に傑出せるものなれバ看まく欲する人年々少なし。古ふかねて這回尚校正をかゝ再刻發市近きにあり。四方の貴官富豪の目を待て需めんことを願ふのミ　板中金堂欽白

野州沼田藩

心齋橋通り北久太郎町　河内屋喜兵衛

同　轉勞町　河内屋茂兵衛

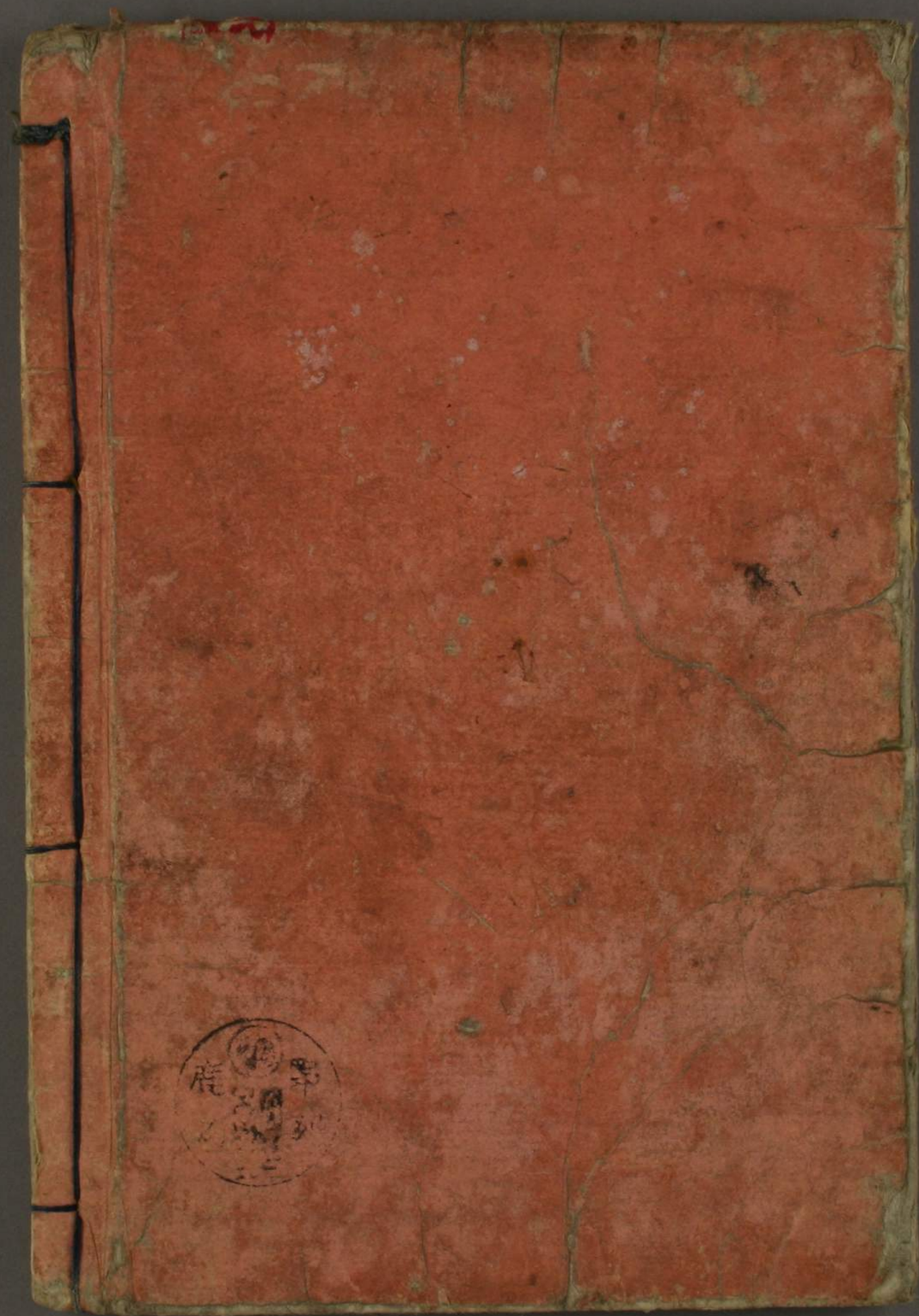
同　南久宝寺町　柏原屋儀兵衛

同　南久太郎町　河内屋源七郎

同　轉勞町　秋田屋市兵衛

同　丹屋善兵衛

兩國米澤町三丁目　金屋又兵衛版

大坂書林

江戸書林